

LGBTQ 報道ガイドライン **簡易版**

多様な性のあり方の視点から

第2版

近年、性的マイノリティについての報道が増え、差別や偏見をなくす大きな力になっています。一方で、適切でない取材や表現により、当事者が傷つけられてしまうこともあります。そのような事例に関する相談を受けてきた LGBT 法連合会は、記者や当事者の意見を参考に、報道ガイドラインを策定しました。このガイドラインが、報道を通じて性の多様性が尊重される社会を実現する一助となることを願っています。

※この簡易版は「LGBTQ 報道ガイドライン」の「取材をする／される際のチェックリスト」から抜粋しています。



取材をされる際のチェックリスト **当事者向け**

1 取材を受ける前に以下のことについて認識しておきましょう

- 顔を公開して良いか、名前まで公開しても良いのか、自身の情報について改めてどこまで公開できるのかを確認・整理しておきましょう。
- 集会、デモ、イベントなど公の場で話したことは、直接の確認なく報道されることがあります。（もともと、公の場で表現してしまったことについて報道されたくないと思った場合、記者に報道してほしい旨を申し入れれば対応してくれることもあります。催しの主催者側が「撮影 NG ゾーン」を設けるなど、メディア向けの「取材ルール」を設定している場合もあり、参加する催しでこうした決まり事があるかを確認しておきましょう）
- 報道されたことによって、好意的な反応だけでなく、ネガティブな反応が出てくることを想定しておきましょう。
- あなたが話したことが、あなたの身の回りの人のアウトティングにならないように留意しましょう。
- あなたの性のあり方をどういう言葉で表現するか、今一度確認してみましょう。
- 話したくないことは話さなくて大丈夫です。取材を断ってもかまいません。話してしまった場合でも、伝えて欲しくない発言があれば、その場もしくはできるだけ早めに記者に伝えましょう。

2 取材を受ける際に以下のことについて確認しておきましょう

- 公開しても良い情報の範囲、報道にあたって配慮してほしい表現・事柄等についてもしっかりと記者に伝えましょう。
- 公開される媒体は、新聞なのか、ウェブなのか、テレビなのか等、どのようなものか確認しましょう。
- 記者の取材の目的や趣旨を確認しておきましょう。
- 必要があれば付き添いの人を連れて行ってよいか、記者に確認してみましょう。
- 編集権はメディア側にありますが、不安がある場合は、取材時・掲載前に発言内容や表現について、相談や確認ができるか早めに問い合わせてみましょう。

3 記事の公開後に以下のことを確認しておきましょう

- 報道の内容が間違っていれば訂正や修正を求めることができます。ただし、訂正や修正に応じてもらえるかは個々のメディアやケースによります。

LGBTQ報道ガイドライン 簡易版

多様な性のあり方の視点から

第2版



取材をする際のチェックリスト 記者向け

1 性の多様性に関する基礎知識を身につけましょう

- 性の多様性に関する基礎知識を身につけておきましょう。本編の「性のあり方に関する基礎知識」を参考にしてください。
- 自分の性のあり方を基準にしないようにしましょう。例えば「(LGBTQではない) ふつうの人」「ノーマルな人」という表現や同性愛を「禁断の愛」と表現する等、異常・異質なものとして位置付けないように注意しましょう。

2 取材相手に以下のことを確認しましょう

- アウティングを防ぐために、取材対象者がどの範囲にまでカミングアウトをしているか確認しましょう。アウティングは重大なプライバシー侵害であり、居場所や心理的安全性が失われることで、時には自死等につながる事態を招く恐れがあります。
- イベント等で取材する場合は撮影 OK / NG ゾーンの有無や、参加者の撮影の同意が取れているかを主催者側に丁寧に確認しましょう。ルールがある場合は取材に関わる全員に共有しましょう。
- 記事や番組がどのような媒体に掲載・転載されるかを伝えましょう。また、取材相手の家族や友人、仕事関係の人に知られる可能性があることを説明しておきましょう。
- 名前（匿名か実名か）、顔出しの有無など、公開可能な個人情報の範囲を確認しましょう。取材相手（や保護者）が顔や名前を出すことに同意していても、将来的に再び隠す必要があるときもあります。未成年はもちろん、就職前の学生などは将来のリスクを認識できているとは限りません。本当に情報を公開して良いか、将来のリスクなど改めて説明した上で慎重に確認しましょう。

3 「性」に関する表記の仕方に注意しましょう

- 本人の性のあり方は本人しか決められません。相手の性のあり方を決めつけず、本人の表現を尊重しましょう。過去の記事に頼らず、本人が選択した言葉と違う言葉で伝えたい時は、本人に確認をとりましょう。
- 見出しやテロップ・字幕が本人の性のあり方を尊重し、適切な表現になっているか等、デジタル版や各版も含めてチェックしましょう。デスクやテロップ作成者など必要な人に注意点を伝えましょう。
- トランスジェンダーの性別に関する表記は戸籍上の性別ではなく本人の自認を尊重した上で対応しましょう。戸籍上の性別を出されたくないという方もいます。また、人称代名詞が「彼女」や「彼」、それ以外なのか等も注意し、本人に確認しましょう。性別への言及が不要な場合はジェンダー中立的な表現を用いることが望ましいです。

4 原稿を書いた後も、見出しやSNS上の表現に注意しましょう

- 見出しやSNS上の投稿文言など字数が制限される箇所では、誤解を招いたり、強い印象を与えたりする表現が用いられやすい傾向があります。記事内容を適切に反映した言葉が使われているか記者が確認し、修正が必要な場合は関係部署に伝達しましょう。